



オリヴィア

てすん (G.NOH)

今日は「ピアノの発表会」だった。

会場は、ビッグベンの見える少し高い建物の空中庭園。

見晴らしがいい割に人はいない。というよりも、「機関」によって人払いがされている。

オリヴィアは自分の身長に迫るほどの大きいバッグを降ろし、中から「楽器」を取り出す。

CHEYFAC M200 Intervention——それが楽器の名だ。

「気温、風向き……目標との距離……1800メートル」

PDAを操作し、弾道補正値を割り出す。

オリヴィア・ヴァンキツシュ。10歳。

ヴァンキツシュ家の養女というのは表の顔で、大英帝国秘密情報部の下部組織、暗殺専門「機関」のエージェントというのが真の顔だった。

130センチ程度のその身長にはあまりにも大きく重たいM200は、バイポッドで支えなければ撃つことすらままならない。オリヴィアの「演奏会場」が屋上なのは、狙いやすく人目につかないだけでなく、ちょうど良い台座が豊富だからでもある。

狙いを定める。ターゲットは人権派の議員。オリヴィアには政治のことはわからないし興味もないが、上が「消せ」と言えば「消す」。それが彼女の存在意義であり、有用性を示してこそ存在が許されるのであれば、それを全力で示

さねばならなかった。

生きるために。

ふと、標的との間に一人入ってきた。若手議員の一人で、最近人気を集めている男だった。

そのままとめて撃ち抜いても良かったが、射線が通るまで待った。特に理由はなかった。ターゲットは必殺。その周囲にいる関係者は、殺してもいいし殺さなくても良かった。だからなんとなく、見逃してみた。心の奥底でわずかに残っている罪悪感がそうさせたのかもしれないが、それはオリヴィアにはわからなかった。

少なくとも彼女は、自分が正しいからやっているとは思っていない。

そして、軽い引き金の音と撃鉄が雷管を叩く金属音、消音器から小さく響く爆発音がほぼ同時に少女の鼓膜を叩き、刹那ののちにターゲットは倒れた。

「ヘッドショット確認。今日の演奏会は終わりね」

Aドバンド・バリステイック・コンピューター——ABCの弾道補正があるとはいえ、長距離狙撃はやはり神経をすり減らす。M200から手を離し、大きくのけぞって深呼吸をする。物心ついてからずっと繰返されてきた訓練。上からずっと「お前には金がかかっているんだ」というプレッシャー。当てて当たり前、外せば処分。自分が選んだ

わけでもないのに、こんな境遇つて一体なんなんだろうと思う。生まれてくる前に、自分は何か悪いことでもしたのか。あるいは、物心着くまでに何か大罪でも犯したのか。

「あは、あははははははは」

そんなことを思っていたら笑えてきた。

「バツカみたい」

本来ならばすぐに撤収するのだが、なんだかそんな気分になれなかった。空を見上げる。清らかに晴れた青空なんでものはそこにはなく、太陽を隠すように薄汚れた雲が空を覆っていた。一雨くるかもしれない。いや、こないかもしれない。どちらでもいい。雨に濡れるなら濡れるで、もしかしたらこの憂鬱な気持ちも洗い流してくれるかもしれない。

そんなことを漠然と思っていた。

気怠い身を起こし、M200を片付けようと持ち上げたところだった。

誰かが近づいてくる気配。警戒しつつ振り向くと、傷だらけの男が息を切らせて立っていた。

「子供……?」

ここは「機関」が人払いをしている建物である。つまり、彼らが警備をしているということだ。それをかいくぐってここまできた。この男は……

「バカね。せつかく見逃してあげたのに、わざわざ来たの?」
射線を塞いだ若手の議員だった。

とはいえ、本人にその自覚はなかったろう。ターゲットが狙われていることすら気づいていなかったはずだ。しかし、撃たれた角度から射点を割り出し、約2キ口を駆けてきたのだ。なかなか有能だと少女は思った。

手にした拳銃はSPのものか。それをこちらに向けて、しかし信じられないという表情で躊躇している。やはりバカだ。

「どうして、こんなことを……」

「それが仕事だからよ。それより、これ重いんだけど、置いていい?」

「あ、ああ。ゆつくり、下に置いて」

こちらに抵抗の意思なしと見たのか、あるいは動揺からの判断ミスか。銃口をそらしライフルを下に置くよう手で指示する。警戒が薄れたその瞬間を逃すオリヴィアではなかった。

置くと同時に狙いのつけにくい相手の左手へと駆け出す。とっさに銃を向け直すのが、遅かった。

「さよなら」

男は、そう聞こえた気がした。すれ違いざまに抜き放たれたダガーは正確に彼の喉元を搔き切り、己の血で濡れさ

せた。

「返り血を浴びてないことを確認すると、オリヴィアは荷物をもとめ、その場を後にした。」

「遠くでサイレンが聞こえる。男が突入してきた際に起こした階下での銃撃音を聞いて誰かが通報した救急車だろうが、それも組織の管理下にあるものだ。オリヴィアは無関心そうに、迎いの車に乗り込んだ。」

オリヴィア

発行日 2019年8月20日

著者 てすん (G.NOH)
<https://www.pixiv.net/member.php?id=3669242>

連絡先 @nu_seat

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
